

医療ルネサンス

No.6913

アートの病院

4/4

霊安通路に見送りの壁画

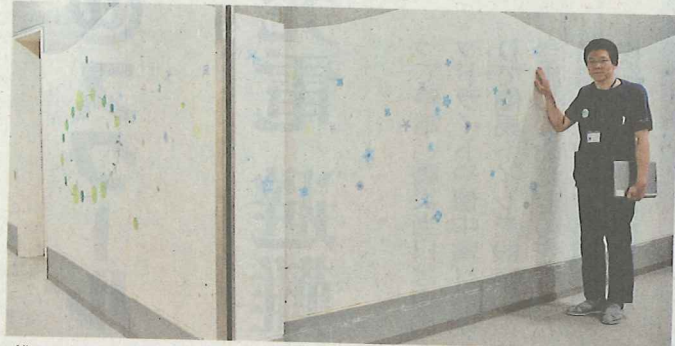
あちこちにアートがあふれる四国(ごもとおとなの医療センター(香川県善通寺市)で、院長から看護師まで病院のスタッフ177人が制作に参加した壁画は、最も目立たない場所にある。

患者の遺体を一時安置する霊安室から霊きゅう車が控える駐車場へ向かう地下通路だ。2013年から様々なアートを取り入れてきた同センターが14年に完成させた。スタッフもみなボランティアとして協力した。

通路の両側25坪にわたって、灰色のコンクリートに白いペンキが波形に塗られ、子ども手のひらサイズの青い花がぼつりぼつりと描かれている。花は一輪ごとに微妙に違い、その脇には描いた人のイニシャルが添えられている。壁画のタイトルは「青い

花に...」。青い花に祈りを込め、死への旅立ちを、みんなで静かに見送る気持ちを表現した。

かつての地下通路は照明も暗く、天井と壁はコンクリートの打ちっ放しで殺風景だった。洗濯物やゴミの搬出ルートも兼ねており、床の汚れも目立った。



患者の遺族の目には冷たく映った。「最後のお見送りのところが、すごく寂しい」。遺族が看護師に嘆いたひと言をきっかけに、壁画を描くことになった。

小児整形外科医長の横井広道さん(59)も、壁画制作に参加した一人だ。午後の空き時間に地下通路に降りると、6月だというのに肌寒さを感じたことを覚えていた。

手術などで力を尽くしても、患者のいのちを救えなかったときは心に大きな傷を負う。敗北感、無力感、喪失感。亡くなった患者に思いをはせて花を描いた。冷たい壁がぬくもりを持つよううれしかった。

看護師長の森智美さん

地下通路で、自分が描いた青い花の前にたたく医師の横井さん

(42)は、長期の看護のかわなく亡くなった患者らを思い浮かべ、「どうか安らかに」との思いを込めた。後日、壁画の通路を通ったある遺族から「寂しい思いをすることなく天国へ行けました」と、声をかけられた。アートは病院のスタッフをも癒やしていた。

霊安室や家族控室にアートを取り入れる病院は、各地で見られるようになった。亡くなった患者が病院を去る際も、地下通路からひっそりと送り出すのではなく、地上の玄関などを使う病院もある。

院長の中川義信さんは「患者さんから、ありがとうの一言があるから、しんどくても頑張れる」と言っている。医師者と患者との間にその言葉が行き交う環境をつくるのが、アートの役割かもしれない。現代医療と現代社会が忘れがちな価値観を、アートは教えてくれている。(山田聡)(次は「COPD」とつきあう)です)